



『所思』

PTA会長 舟木 正

年度当初のPTA会報「星高」に「PTA活動」と題して、日頃より感じているPTA活動の在り方や組織としての問題に対して、今年度の取り組みと思いを書きました。

今年度で会長職が終わることもあって、自分がPTA会長を務めることになった最初の挨拶文を読んでもみると、市内の県立高校である工業高校においても定員割れが起きていて、県下でも高校再編の動きが加速する状況にあります。しかし、私立高校では学力、吹奏楽や部活動に力を入れ、生徒数が大幅に増加傾向となっています。特色ある教育が魅力となり、子供たちがあの高校に行きたいと思える学校づくりを保護者と教職員がスクラムを組んで行かなければいけない。義務教育までのPTAとは違い、子供たちに将来を意識付け出来る活動を目指さなければならぬ、ということを書いていました。しかし、現実には27年度からは1クラス減の2クラスとなり、教職員数が段階的に減少することになりました。今後、教科や部活動に影響を与えることは必然となります。このような状況だからこそ特色ある学校づくりが急務だと改

めて感じました。

P(Parent)に出来ることは、学校行事やPTAの活動に参加することです。義務教育である小中学校のコミュニティとは違い、広範に亘るからこそ積極的に参加しなければ知るのとさえも出来ないと思います。部活動では保護者同士の繋がりがあのにPTAでは生かされていないのではないのでしょうか。我々親世代が育った高校生活の環境とは著しく変わって来ていることは、PTA活動に携われれば感じる事が出来ます。T(Teacher)に出来ることは、子供たちの学力と人間力を伸ばすために地域の環境や資源を活かすことです。保護者に対して、学校が、クラスが、どのような状態なのかを情報提供して、もっと子供に、学校に関わることの大切さを伝えなければならぬと感じます。関わるという事で、あらゆる負担が生じますが、保護者が負担を感じることは当たり前と捉えなければと思います。PとTが本気で取り組めばこそ、江津高校は魅力ある高校となり、この町に必要な学校として残って行くはずです。これからもそんな思いを持ち続け、江津高校を見て行きたいと思えます。最後に生意気なことを言いましたが、PTA活動にご理解とご協力をいただいた会員の皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございます！

『教員生活を振り返って』

教頭 松川 均

初任校は隠岐島前高校でした。生まれて初めての隠岐の島。七類港から大型船に乗り、約3時間。下船を知らせる放送と隠岐民謡のしげさ節『隠岐は絵の島 花の島 磯にゃ波の花咲く 里にゃ人情の 花が咲く』が迎えてくれました。高校は着岸した海士（あま）港近くの高台にあり、内海が一望できます。第一期生が作詞した校歌は、次のフレーズから始まります。『鏡の名負う碧き海』。卒業生が作詞した校歌は初めての経験で、人なつっこい生徒ともに3年間を送りました。

そして、松江東高校に異動。創立3年目のほやほやの高校です。6年間、漕艇部（ボート部）の顧問。県内に漕艇部は、松江北・江津工業高校あわせて3校ありますが、インターハイや3校合同クルーが夏の国体に出場しました。大会に出場できることは大変うれしく光栄なことです。1週間近く学校を不在にするため、帰ってくるたびに振替授業を含め1週間、毎日5・6時間担当しました。またの時期は学園祭と重なるため、担任でありながら合唱コンクールや体育祭の記憶がほとんどありません。次に、母校の浜田高校に異動。7

年間のうち連続して4年間、3年担任と補習科担任を経験しました。街で時々卒業生に出会います。当時の担任でありながら、名前が出てこないことが残念です。その後、益田・矢上高校など勤務させていただきました。

講師からスタートし、江津高校が12校目の学校になります。長年の教員生活で感謝しなければいけないことは、生徒の皆さんに教えられ自分を成長させていただいたことです。江津高校の校歌に『希望果てない若人が 好学の念ゆるぎなく』とあります。生徒の皆さんは、夢や希望を持ち学ぶことを大切に邁進してください。ありがとうございました。

『後輩へのお願い』

総務部長 田中 政一

昭和49年3月に江津高校を卒業して、平成28年3月に教員として江津高校で卒業を迎えるのも何かの縁かもしれません。高校1年生の時、友達になった人物がバレー部に入っていて、それが縁でバレー部に入部したのが自分の人生を決定しました。高校時代バレーの指導者がいれば大学に入学してバレーを続けて指導者としての道を目指さなかったと思います。大学を卒業して運よく島根県の高校でバレーの指導を始めることができました。隠岐高校の4年間、江津工業の3年間は男子バレー部、江津高校の11年間、浜田

高校の5年間、矢上高校の7年間、江津高校の8年間は女子バレー部の顧問をすることができました。体育の教員でない私が38年間バレー部の顧問を続けてこられたことは本当にありがたいことです。一緒に勤務した先生方に感謝しています。

江津高校で女子の指導をするようになって女子の指導の難しさを知りました。応援幕に「志は気の帥なり」を掲げるようになったのもこの時からです。石見部の生徒を指導してきて自分の気持ちの中には、常に「今に見ている、東部の強いチームに勝ってやる」「負けてたまるか」という熱い思いが自分を支えていたと思います。指導では「バレーを通して人間をつくる」をモットーにしてやってきました。バレーはロボットがするのではなく、人間が心でするのです。人間をつくらぬと試合には勝てないという思いからです。

バレーの試合には、勝ち負けはあるが人間として負けて欲しくないという思いがあります。「勉強をしなさい」「高校生として当たり前前の生活が、当たり前前にできるようにしなさい」と言い続けてきたのはこの思いからです。常に人間としての成長を目指し、毎日の勉強、日常生活に手を抜かずに進んでいって欲しいと強く願っています。

『思い出の木造校舎』

事務長 大畑友幸

37年間の県職員生活で12か所の職場を転々とし、もうすぐ定年退職となります。

学校勤務は本校で3か所目ですが、最後の2年間はまさか自分の母校で勤務するとは全くの想定外でした。2年前、赴任して最初に感じたことは下のグラウンドにあった、細長い木造平屋建ての古い校舎がなくなっていることへの寂しさでした。当時はまだ現在の校舎はできていませんでしたので、2年生までの高校生は木造校舎で過ごしました。3年生になって初めて今の校舎に引っ越ししましたので、いってみれば現在の校舎に誰よりも最初に入った生徒となります。

思い出も木造校舎のほうがたくさんあります。200メートルはあったでしょうが気の遠くなるような所々軋む長い廊下、距離がありすぎて行くのに疲れた音楽室、長い階段を上りたどり着く体育館、動かない窓で隙間風が入る教室、あちこちあった廊下への雨漏り、廊下の途中にあった大きな石の段差など（若干誇張しています）。

月日の経つのは早いもので卒業してからもう42年になります。完成直後の真新しかった校舎もあちこち老朽化が進み、傷みが激しくなっています。その校舎の修繕が今の私の仕事となってこようとは、これも想像もしてなかったことです。

生徒の皆さん、はるか昔はグラウンドにとってもなく長い校舎があったんだと卒業生に覚えておいて、そして語り継いでいってほしいと思います。長い間ありがとうございました。